付　論

弥生時代墳墓の土器、あるいは〈まつり〉の土器
——後期を中心として——

I

これまで、〈まつり〉は「祭祀的」という用語によってくくられてきた。だが、「祭祀的」とは一体どのような事態を指すのであろうか。

現状において「祭祀的」という概念は、いわばブラックボックスであって、われわれが分類を行うにあたって、対象化できないものを貯蔵する場所となっている。一旦「祭祀的」とされてしまえば、それは分析の対象とされることもなく、閉じ込められてしまう(1)。

「祭祀的」とは、具体的な事態の想定なくして、イメージ化は不可能である。しかし、「祭祀的」としてくくられたものの多くは遺物であり、しかも廃棄されたものがほとんどである。その「廃棄」現象のなかに祭祀を読み取ることは、きわめて至難である。

「祭祀的」遺物は、「特殊である」といわれる遺物が往々にして「祭祀的」と形容されることによって生まれる。だが、同じ「特殊である」といわれても、それが遺構であれば、「祭祀的」といわれることは少ない。「祭祀的」とは、「物（モノ）」の属性であって、構築物には伴わないのであろうか(2)。

現代のわれわれにとって、異文化が特殊であるのと同様に、過去の文化も特殊である。したがって、われわれに属すもの以外はすべてが特殊となるであろう。しかしだからといって、われわれはそれらに対して「祭祀的である」と形容することはない。祭祀的であるか否かは、われわれと対象物との関係ではないからだ。

「祭祀的」であると言う以上は、「祭祀」自体が分析の対象にならなければならない。それは人間活動であり、事物（遺構・遺物）はその一部を構成するに過ぎない。そして、考古学が対象にするものは、事物を経由しての人間活動であるはずだ。廃棄自体をもし「祭祀的」と言うのであれば、他の廃棄との区別をどのようにしてつけるのか、を明らかにしなければならない。つまるところ、それは事物に関係する〈時〉と〈場所〉の問題ということになろう。

II

〈まつり〉の場面には、人の身ひとつでの身体動作と、道具を用いての身体動作との二つが考えられる。前者は考古学的に接近するのは難しいが、後者は遺物として残れば対象化できる。

集落内での活動は普通〈日常的〉という性格づけが行われる。それに対して墓域での活動は〈非日常的〉といわれる。だが、〈祭り〉は生活域で行われても〈非日常的〉なものである。

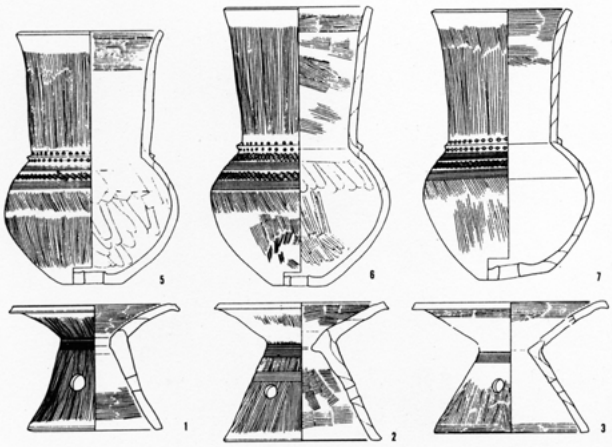
〈日常的〉〈非日常的〉という区分は時間的な基準による場合と、空間的な基準による場合の二つが考えられるのであり、上述の事態はそれによって区分されねばならない[3]。そこで、遺物について〈日常的〉か〈非日常的〉かを判断しようとする場合、集落内での遺物のあり方についてそうした説明をすることはほとんど不可能である。われわれにできるのは、用途の明確なものを〈日常的〉とし、不明確なものを〈非日常的〉とするぐらいのことである。そしてこの〈非日常的〉とされるものが、一般的に「祭祀的」とされてきた経緯がある。

このように、生活域の資料について日常的要素と非日常的要素を区分することは困難だが、墓域においてはどうであろうか。墓＝非日常的としてしまえば、すべて非日常的要素となるが、出土遺物の多くは生活域出土のものと区別がつかない。二次的な加工が遺物に施してあれば、しかもそれが生活域で考えられる用途あるいは機能を損なうものなら、日常的要素に共通しないということで〈非日常的〉ということもできる。しかし、それは生活域における〈日常性〉を変形して〈非日常性〉に転化させたものに過ぎないのであり、〈非日常性〉固有でない[4]。

III

伊勢湾周辺地方の弥生時代墳墓は、方形周溝墓の場合、凹線紋系土器出現期（中期４）以後には周溝内から多量の土器が出土するようになる。それ以前には土器を全く伴わないか、あっても壺を中心として２、３個体が普通であったのが、ほとんどの方形周溝墓から土器が出土するようになるだけでなく、多いときには壺・高杯・器台・鉢・甕などが何十個体も出土することもある。このような凹線紋系土器出現期以後の様相は、単純化して言えば方形周溝墓と土器とのつながりが緊密になったことを示している[5]。

土器の多くは破片で出土するが、完全なかたちで出土するものもある。凹線紋系土器期には多量の土器群が周溝内から破片となって出土することが多く、そのすべてを墳丘上に置かれたものが墳丘の崩落にともなって転落したと観るには困難が伴うが、それ以後には完形品が多くなることから、墳丘上に置かれたという観かたは妥当であると考える。現状では墳丘上にどのように置かれていたのか知ることができないとはいえ、出土地点が一点に限定されないことを見れば複数の地点に置かれていたと考えられる。



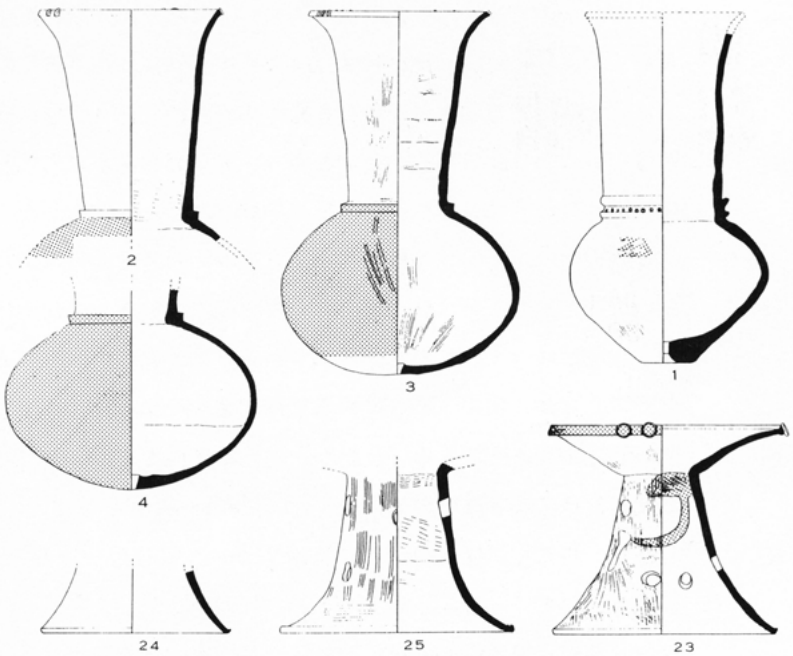
勝川　ＳＺ19

これら周溝内から出土する土器には「供献土器」という名称が与えられている。だが、「供献土器」とされても、土器そのものが供献されたのか土器の内容物が供献されたのかについて述べたことにはならない。破砕されたとする場合も、「歌舞飲食」後に廃棄されたというのであるが、食器ばかりが出土することはないから、妥当性は低いだろう[6]。

土器は日常生活の重要な器物である。食事の準備の煮炊きに使う器、食べ物を盛り付ける器、食糧の貯蔵、動産の貯蓄など、用途は多様である。だから、

日常生活に用いられたのと同じ土器が方形周溝墓から出土したなら、土器群としては同じ形態であることになる。それでも性格が日常的ではないというのであれば、「墓からの出土」という一点が区分の基準となる。

居住域と墓域は、環濠集落では濠によって分離されることがある。だが実際は、それは単なる外観であって、環濠が機能していなければ分離するものは何もない。弥生時代には居住域と墓域を分け隔てる構築物は存在しないのだから、生活用具としての土器と墓の土器を区分しようとするなら、それは土器に即して検討しなければならないことになる[7]。



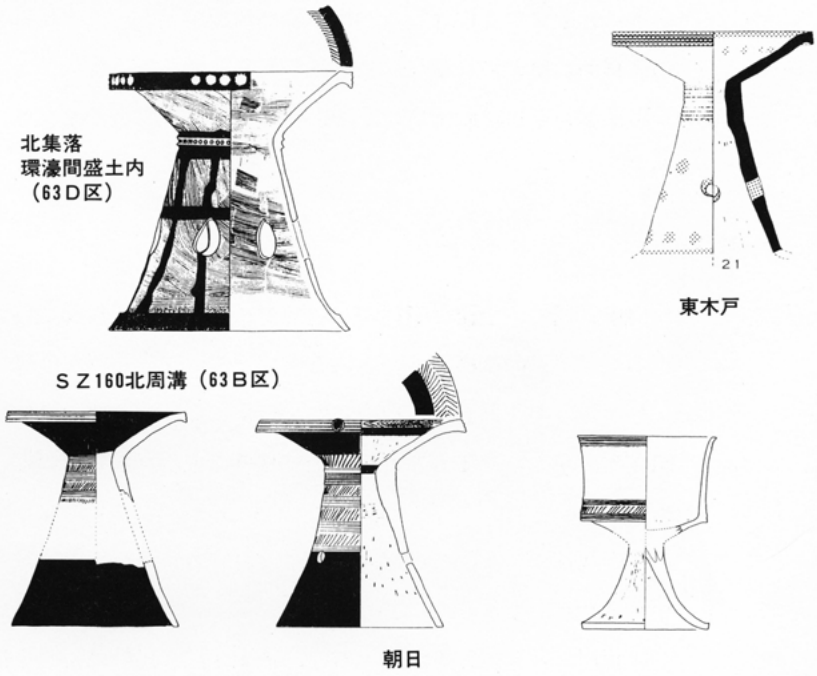
蕪池

IV

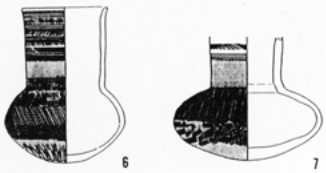
伊勢湾地方の弥生時代墳墓には、出土土器に焼成前穿孔の行われたものがある。山中式期では、三重県津市高松遺跡や同大ケ瀬遺跡で検出された墳墓出土の高杯杯底部中央に穿孔が施されていた。また、愛知県一宮市蕪池遺跡や春日井市勝川遺跡ＳＺ19出土土器では、焼成前穿孔が底部に施された長頸壺が含まれている。欠山式期では愛知県大口町仁所野遺跡の方形周溝墓から焼成前穿孔の施された高杯が出土している。弥生時代中期には、一部壺などの下胴部に焼成後穿孔されたものはあったが、焼成前穿孔されたものはほとんどなかったから、これは新しい様相である。

上記のような焼成前穿孔土器とともに出土する特徴的な土器として、高杯脚部とは異なる作りでやや大形の器台Ａがある。器台Ａは、以前の凹線紋系土器出現・展開という新しい土器体系の中でもほとんど皆無に等しかったもので、それが山中式期になってにわかに目だつようになる。

器台Ａは、高杯の製作技法上の流れ



に含まれず独自な器種としてあり、山中式期中ごろ以降に普及する高杯脚部相同形（→器台Ｂ）とは異なる。朝日遺跡、名古屋市高蔵遺跡例については口縁部の特徴に共通性があり、同一系譜に置くことができる。ただ、例数の著しく少ないことは否めないのであり、なお検討の余地を残している。



蕪池遺跡では、方形周溝墓から出土したかどうか明確ではないものの、焼成前穿孔の壺３個体と器台Ａ２個体が出土している。勝川遺跡では、ＳＺ19から焼成前穿孔壺と器台Ａが３セット出土している。勝川遺跡の器台は脚部がやや低いものの、壺と器台の製作技法が共通していること、脚台部が他では認められない形態をしていることが注目される。

高蔵ＳＤ04

多数の方形周溝墓が検出された朝日遺跡では、これまでのところ底部焼成前穿孔長頸壺は出土していない。だが、器台Ａは出土している。やや古手の１点は北居住域２条環濠間の盛土下部から出土している。他には方形周溝墓ＳＺ160からの出土例がある。しかし、現状で居住域出土例の有無ははっきりしていない。

高蔵遺跡ではＳＤ04からやや小形化傾向のうかがえる器台Ａが出土している。焼成前穿孔は施されていないが、組み合わせ可能と考えられる長頸壺は出土している。

以上を整理する。

焼成前穿孔土器。これには長頸壺と高杯がある。そして、長頸壺は器台Ａと組み合わさる場合以外の出土例は朝日遺跡以外で知られていない。長頸壺と器台Ａの関係は勝川遺跡例を参考にするなら、製作時にすでに組み合せが決定されていたということになろう。

つまり、

①「焼成前穿孔長頸壺＋器台Ａ（のみ、かあるいはそれら＋その他の土器）」

②［器台Ａ（のみ、かあるいは器台Ａ＋焼成前穿孔土器以外の土器）］

③［焼成前穿孔高杯＋その他の土器］

の３類型が設定できる。

上記３類型は、時間的には①が古く②と③が並行して、③が後まで残るという変遷図式を描くことができる[8]。

Ⅴ

山中式期に、上記３類型が出現する。これは集落遺跡で確認されていない。したがって、現状では土器の〈墳墓的様相〉ということができる。

しかし、それは様式的な安定性を獲得することなく、通常タイプの器台Ｂや長頸壺の普及、台付長頸壺の出現あるいは、器台Ｂと受口状口縁系浅鉢などの組み合せに変化して無規定的な様相を見せるようになる。

欠山式期にも上記③は存在するが、限定されている。やはり、広域化するだけの基盤が成立していなかったということか。

墳墓用にのみ製作される土器は、上記３類型以外にも山中遺跡ＳＺ03小形壺に見るように、粗雑さ

を特徴とする土器として欠山式期の初相には出現している。「粗雑さ」は、集落出土土器との形態・製作技法上の共通性をほとんどもたないのであり、その「粗雑さ」が〈非日常性〉を示しているように思われる。

墳墓出土土器の独自性の発現は、伊勢湾地方について見る限り、山中式期への移行と同時である(あるいは山中式期の指標の一つがそれである[9])。しかし、その初期墳墓的様相である①は安定して継承されることなく、②③と展開する多様化の中に埋没する。これに代わって新たに浮上するのが、精粗の2相であり、一方の精を代表するのがパレス式広口壺である[10]。

(石黒立人)

註

(1) ここで「祭祀的」という意味を辞書的に規定しても、それによって得るところはほとんどないであろう。ブラックボックスであるということは、意味が他律的であることを含意するのであり、自律的な規定を志向している本稿ではそれこそ無意味となる。

(2) 「廃棄土坑」という用語があるが、これは意味的には不適切である。「廃棄された土坑」であるのか、「廃棄物を埋めるための土坑」であるのか、など十分に規定できていない。類語的である「祭祀土坑」という用語も同様に不適切である。

「祭祀」と「土坑」との関係が十分に整理説明されることなく、特定遺構の性格規定にまで踏み込んでいることがままみられる。

「祭祀土坑」という名称では、「祭祀が行なわれた土坑」であるのか、「祭祀に使われた土坑」であるのかがはっきりしないし、後者の場合でも多くの遺物は廃棄されたものであるから、「廃棄」=「祭祀」という図式化を生じる余地さえ内包してしまうことになる。検討課題である。

(3) エドマント・リーチ(青木保、宮坂敬造訳)『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店1981、参照。

(4) 〈日常性〉と〈非日常性〉は、二項的に明示的に対立するものでもなく、両者は同一事態の二面であることが多い。つまり、限定された意味空間において限定された意味を付与される原因または結果としての〈日常性〉と〈非日常性〉であるにすぎないのであり、意味空間から切り離されてもなお、ことさら〈非日常性〉固有を問題にするとすれば、それは人間活動のダイナミックスを軽視することになるといえる。我々は〈日常性〉〈非日常性〉を成り立たせている意味空間そのものの把握に向かわねばならない。

(5) 生活レベルの意味空間に属していた土器が、非生活レベルの意味空間に取り込まれていった事態を示しているのであろう。

(6) 「破砕された」というような人為性を観ることは、実際問題として困難である。恐らくどんなにこまかく出土状態を分析したところで、「歌舞飲食」の場を確定しない限り、「破砕された」というだけの根拠を得ることは不可能である。そもそも「歌舞飲食」の場が把握できないのだから、画餅と言わざるを得ない。

(7) 非生活空間に取り込まれた土器が、両義性を喪失して非生活空間に固着され、その結果生活空間との異質性を顕わすようになる段階をもって、「祭祀土器の成立」と言うことができる。

この「祭祀土器の成立」を問うことが、本稿の主題の一つでもある。

(8) ①②③を時間的に位置づけるなら、本文のようになるが、空間的に位置づけること

ができるのであれば、土器に表わされた秩序をそこに読み取ることもできるだろう。つまり、方形周溝墓制が、特に後期にあっては一遺跡（集団）内で完結することなく、地域社会として広域性のなかに秩序化されているかもしれないのである。

(9)　一器種の出現で画期を区切るか、複数器種の出現で画期を区切るのかという点にも関係するが、これは量の問題ではない。広域性の問題、つまり、外的契機の重大さがどこにあるのかといった問題である。この意味で、器台の表面化は外的契機の最たるものであり、中期末以来の方向性をより明確に表わしたものと言える。

(10)　いわゆる「欠山式」の成立に対応すると考えている。

参考、引用文献

- 一宮市史編さん室　1967『新編一宮市史　資料編㈡』
- 大口町教育委員会　1983『仁所野遺跡』
- ㈶愛知県埋蔵文化財センター　1990『廻間遺跡』
- ㈶愛知県埋蔵文化財センター　1991『朝日遺跡Ⅰ』
- 愛知県教育サービスセンター　1984『勝川』
- 津市教育委員会　1970『高松弥生墳墓発掘調査報告』
- 名古屋市教育委員会　1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』